

489 流動食を用いた RI 胃排出機能検査

その1 糖尿病患者の胃排出機能

多田 明, 油野民雄, 久田欣一(金大 核)
荒木一郎, 上野敏男(金大 二内)

市販されている流動食「オクノソー」と ^{99m}Tc -スズコロイド $200\mu\text{Ci}$ による胃排出機能検査を47症例に対して60回検査を施行した。内訳は正常者9例, 糖尿病患者(DM)21例, その他17例である。DM群21例は男性10例, 女性11例, 年齢21才~73才(平均55才), DM歴は, 0~30年(平均9.3年)であつた。合併症のあるものが14例(6.7%)であつた。

胃排出テストは15分毎に90分までの胃部カウントを測定し, 半分に減少する時間で表現した。正常者の $T_{1/2}$ は54分±6分であつた。

DM群において, DM歴, 治療法, FBS, HbA_{1c}, 合併症の有無と程度による胃排出機能の程度を検討した。

DM歴, 治療法, HbA_{1c}, などとは相関が認められなかつたが, 合併症がある群で $T_{1/2}$ が遅れ, 合併症の数が増加するほど $T_{1/2}$ が遅れる傾向が認められた。軽度のDMでは $T_{1/2}$ が早くなり, 重症になるほど $T_{1/2}$ が遅れてくることが予想された。

490 核医学検査による消化管出血部位検出の基礎的検討

谷口脩二, 清水 宏, 田中茂子, 佐崎 章,
沢 久, 越智宏暢, 小野山靖人(大阪市大 放)

消化管出血特に小腸, 大腸の出血巣検索に核医学検査法は極めて有用となつてきている。使用放射性医薬品(以下RI)はいくつかあるがRIにより血中クリアランスが異なり出血巣の診断に最も重要であるターゲット・バックグランド比もRI投与後経時的に変化する。我々は家兎を用いRI投与後の経時的血中濃度の変動, 屠殺後の臓器分布を調べまた家兎による出血モデルを作成し出血部の検出能を比較検討した。使用RIは ^{111}In -oxine 標識赤血球, ^{99m}Tc -in vivo 標識赤血球(Pavel法, Mckusickの改良法), ^{99m}Tc -in vitro 標識赤血球, ^{99m}Tc -HSA, ^{99m}Tc -fibrinogen, ^{99m}Tc -硫酸コロイドの7種である。血中濃度, 臓器分布からは ^{111}In -oxine 標識赤血球が最もすぐれていたが調製に時間を要するという点から問題が残る。 ^{99m}Tc -in vitro 標識赤血球も良い成績を示したが同様の問題がある。調製が簡便な ^{99m}Tc -HSAなどは消化管への分布が高く血中濃度の低下も比較的早かった。 ^{99m}Tc -in vivo 標識赤血球ではPavel法は消化管へ早期に分布するという欠点を有するがMckusickの改良法はその欠点を補いまた調製の点からもすぐれていた。